

神秘学ポエジー 風遊戯
photopos
117

【神秘学ポエジー～風遊戯 第234集】 photo ヴァージョン

photopos 2901-2925

《2022.8.18～2022.9.11》

神秘学遊戯団



偶然には
偶然の理由（わけ）がある
知られない理由がある

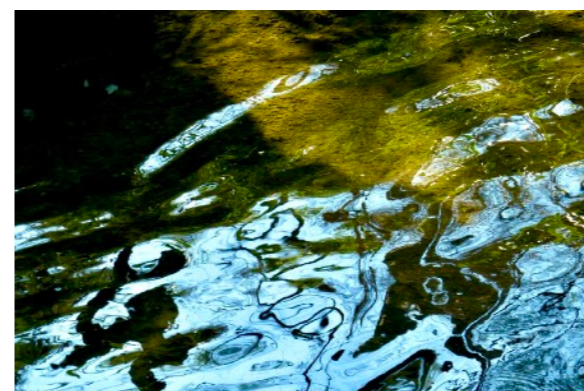
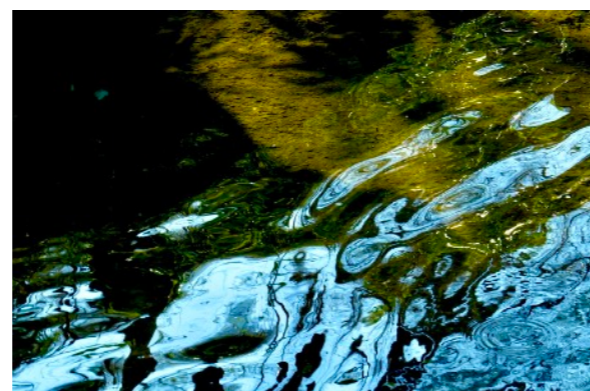
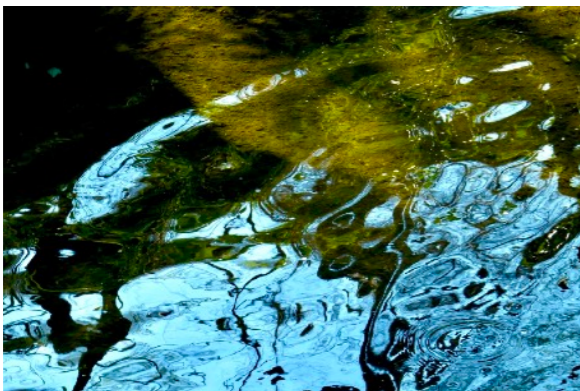
偶然は訪れ
ひとはそれを驚くが

ひとは深みで
その理由を知っている
知ってはならない
その理由を知っている

かたちには
かたちの理由がある
ひみつの理由がある

かたちは生まれ
かたちは作られ
かたちは変わってゆくが

かたちはひとを見て
その深みで生まれる
かたちにあわせ
みずからを変えてゆく





どうして耳は
眼のように
閉じられないのだろう

聞こえる音ではなく
聞こえない音を聞くためにこそ
耳はつねにひらかれているのだ

ひとは
聞こえない魂で奏で
宇宙は
聞こえない音楽に満ちている

耳は
みずからを超えて育ち
聞こえない音を
聞くためにひらかれた
逆説の器官である

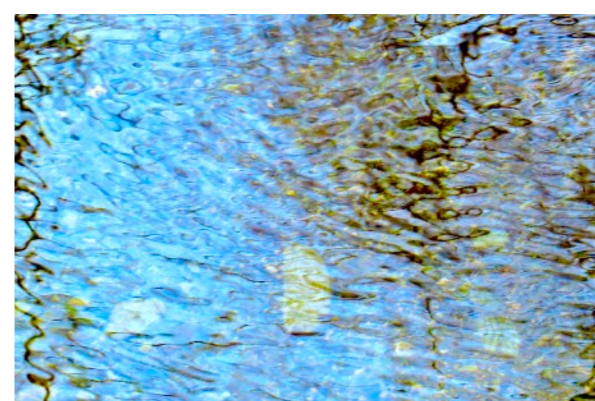
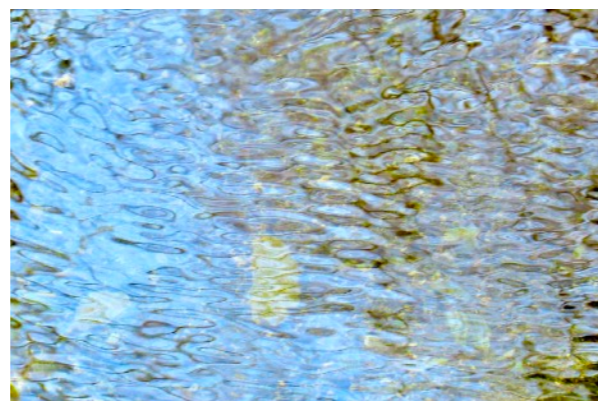
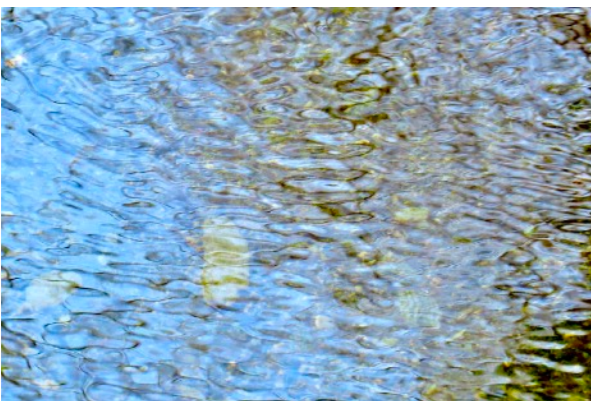
それなのに
聞こえない音が
聞けなくなったことに
気づけずにいる

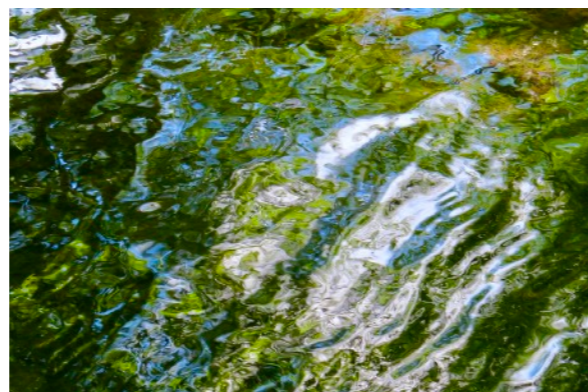
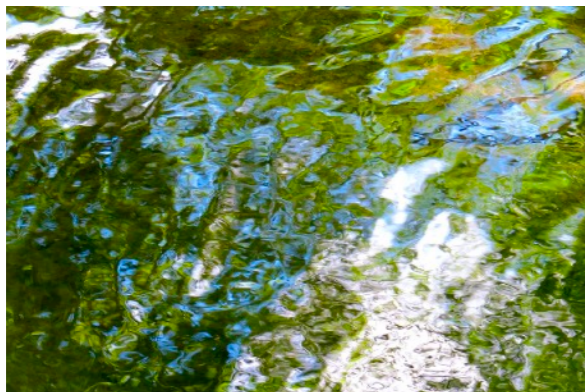
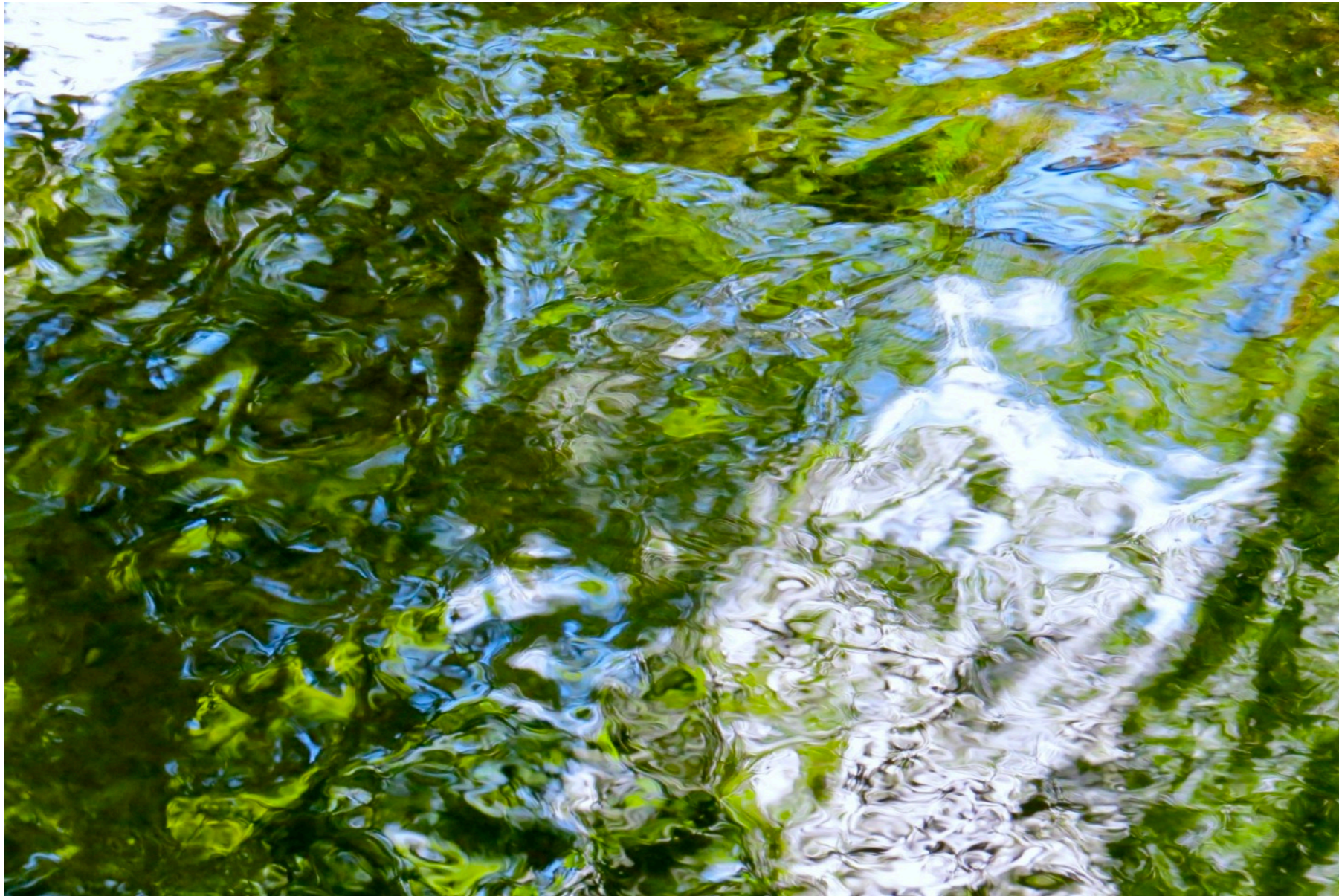
どうして眼は
耳のようにいつも
ひらいてはいないのだろう

光がほんとうは
みずからの内に
生きていることに気づくためだ

目を閉じるとき
ひとはその闇のなかで
みずからの光に
気づかねばならない

それなのに
みずからの光を
失くしてしまっていることに
気づけずにいる





名は
存在を
境界づける
魔法だ

ほんとうの名
なるものを知られると
その名で
操られることにもなるように

それは
ファンタジー世界の
話だけではない

名はたしかに
ひとを操る魔法なのだ

名で呼ばれると
ひとは
その名に縛られてしまう

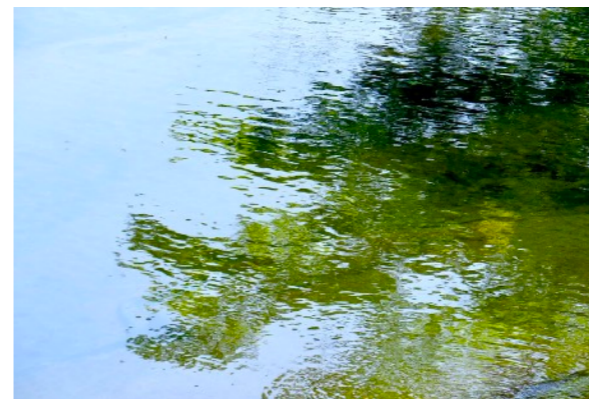
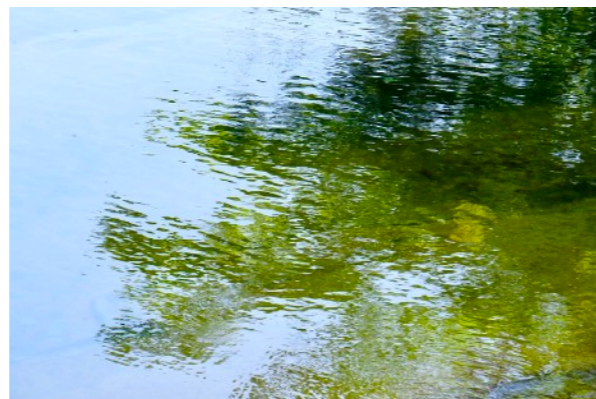
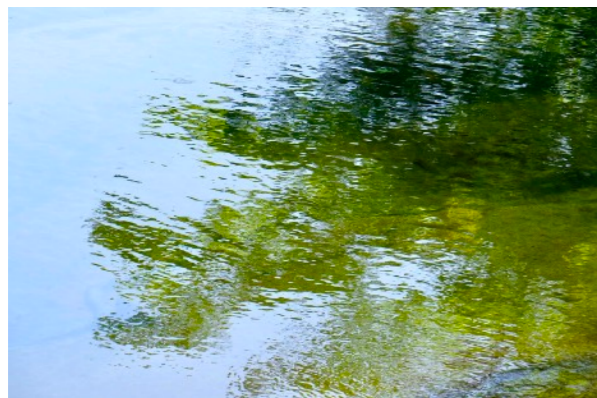
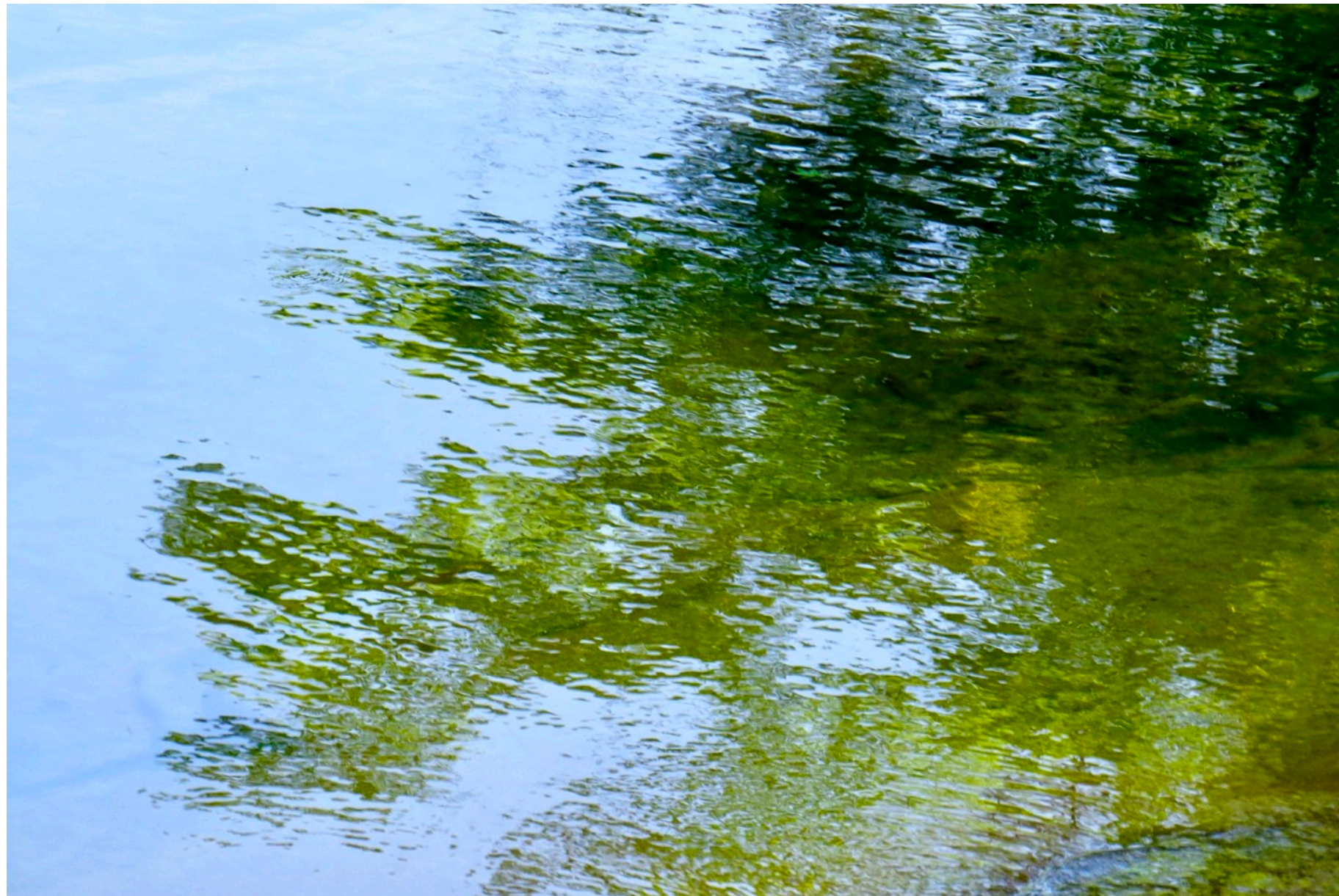
ひとの関係も
役割も職業も
名そのものだ

それは
じぶんでじぶんに
暗示をかける魔法でもある

じぶんを
名づけると
ひとは
その名の外には
出られなくなるように

わたしがじぶんを
わたしと名づける
そのことだけで
わたしは
わたしの外には
出られなくなる

名の外へと
解放されるための
自由の魔法は
どこにあるのだろう



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

知ろうとしないことだ

知ろうとすると

そして

知ったと思ってしまうと

それは

とり逃がさされてしまうから

知ることは

いつも

後からおとずれる

または

知らないままに

知識となってしまう

まず

それに向き合い

深みで受けとること

それは

名づけられない

それは

わたしと分けることはできない

そこから

すべてははじまる

知ることからはじめる者は

すべてを記号にしてしまう

記号はその死体だ

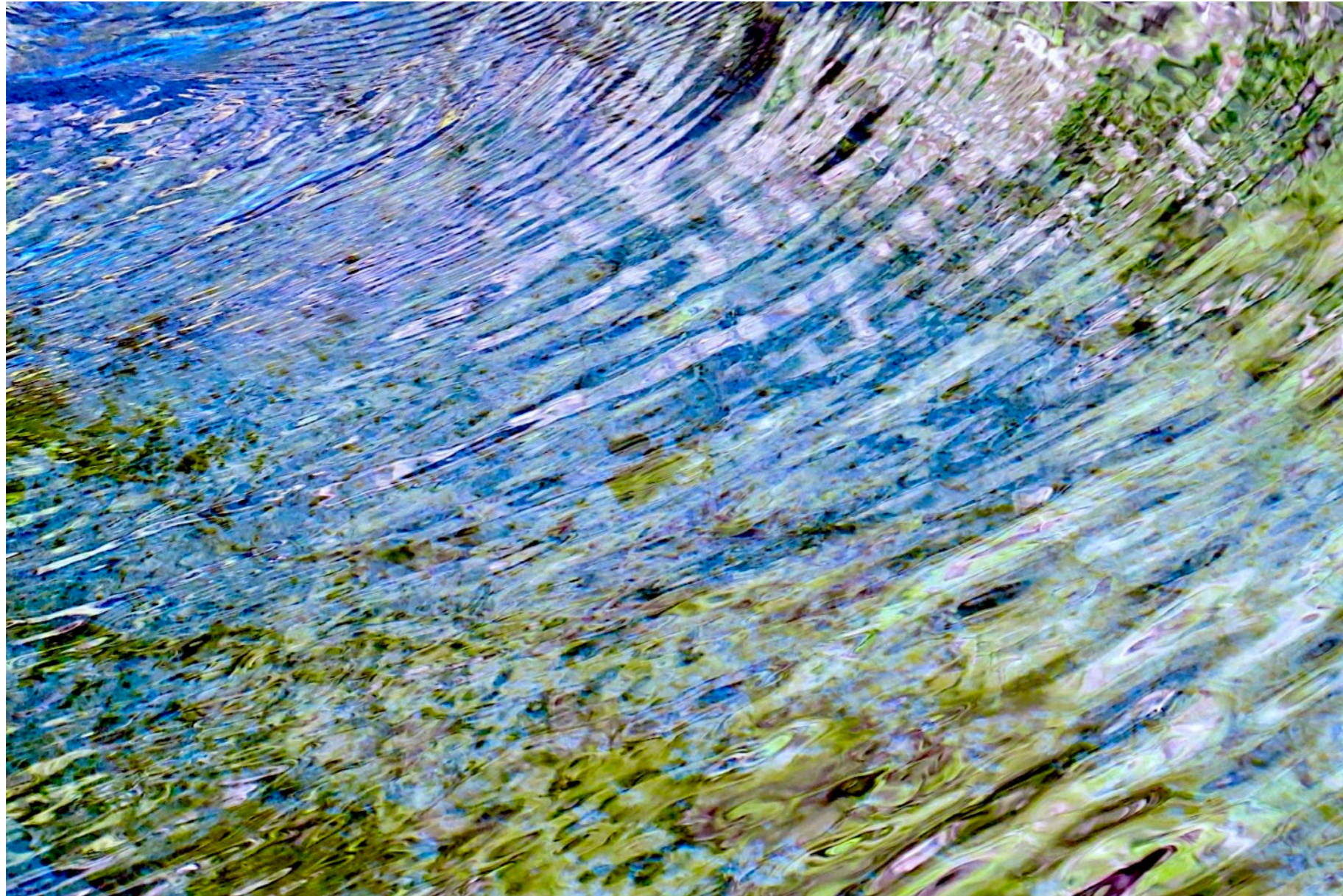
死体にはたいせつな

いのちが欠けている

知ろうとしないこと

名づけられないものを

深く観ずることからはじめるのだ



わたしは
大地とともにある

大地が生まれるとき
わたしも生まれ
大地が揺れるとき
わたしも揺れる

そして
大地が自由になるとき
わたしも自由になる

わたしは
水とともにある

水が流れるとき
わたしも流れ
水が留まるとき
わたしも留まる

そして
水が自由になるとき
わたしも自由になる

わたしは
火とともにある

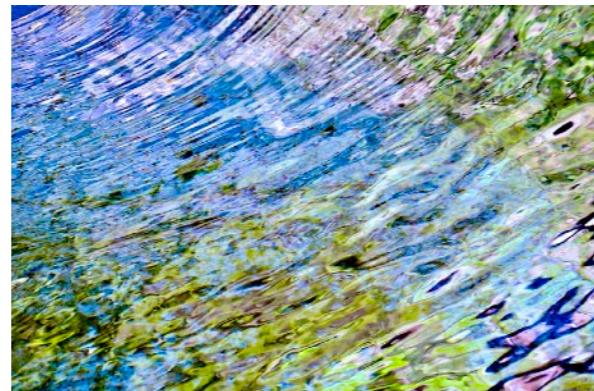
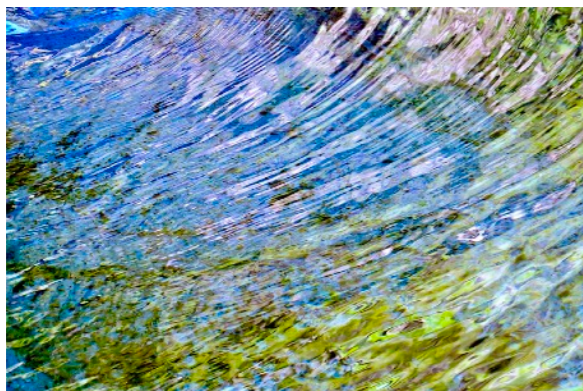
火が燃えるとき
わたしも燃え
火が燻るとき
わたしも燻る

そして
火が自由になるとき
わたしも自由になる

わたしは
風とともにある

風が吹き過ぎるとき
わたしも吹き過ぎ
風が舞い踊るとき
わたしも舞い踊る

そして
風が自由になるとき
わたしも自由になる



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



言葉が
世界だったら

ひとは
言葉のなかで
生きなければならない

言葉のなかで
生きるならば

言葉が愚かになれば
世界も愚かになり
ひとも愚かになる

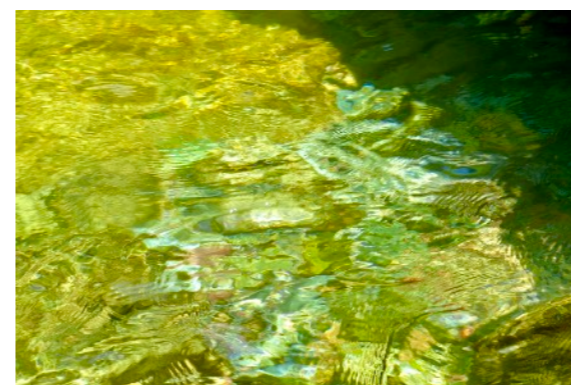
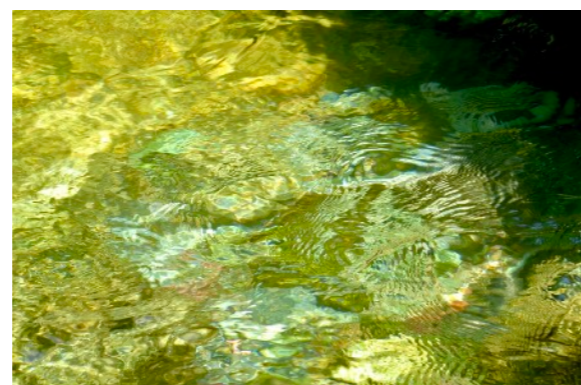
ひとが
言葉を生んでいるなら

そしてその言葉が
世界をつくっているなら

世界が愚かだとしたら
愚かなのはひとなのだ

嘆いているのは
言葉のほうだろう

じぶんたちを愚かにしたのは
人間たちなのだ
言葉たちは
人間からの解放を
求めているのかもしれない



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



作ることは
作られること

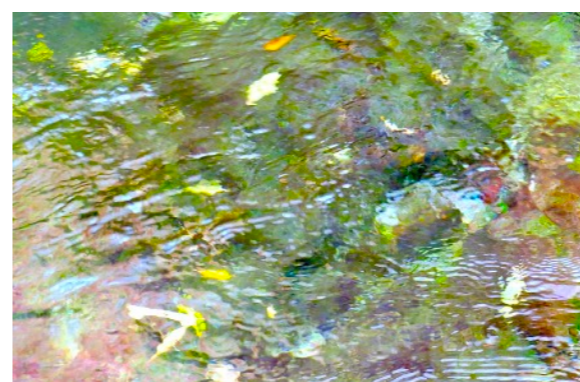
作り作られ
作り作られ
作り作られ
作り作られ

わたしとせかいは
その創造の相即を
めぐりつづけながら
まだ見ぬものを
作ろうとしているのか

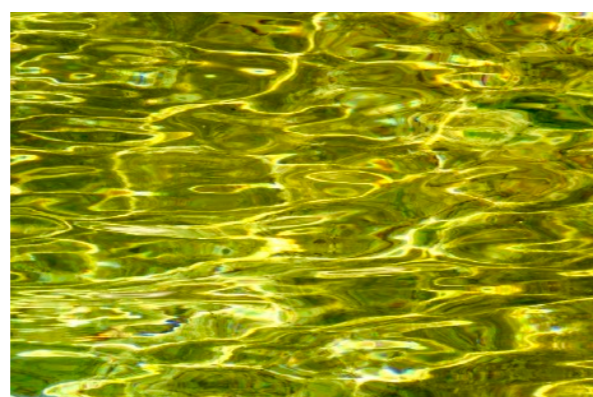
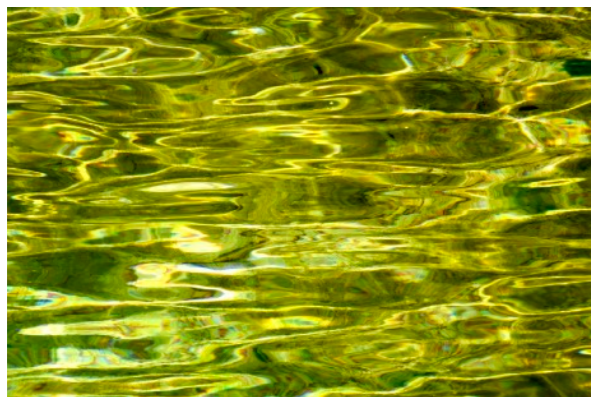
与えることは
与えられること

与え与えられ
与え与えられ
与え与えられ
与え与えられ

わたしとせかいは
その贈与の相即を
繰り返しつつけながら
まだ得られぬものを
求めようとしているのか



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

じぶんは
正気なのか
狂気なのか

ほんとうのところは
わからないけれど

安心するためには
みんなとおなじことをする
それはひとつの方法ではある

少なくとも
みんなとおなじならコワくない

けれど
あえて黒い羊でいることで
じぶんに正直でいることもできる

なにが
正気なのか
狂気なのか
ほんとうのところは
わからないけれど
あえて黒い羊でいる

黒か白かは
みんながそう決めるのだから
みんなと違っていれば
黒とされるだろうが

ときに
黒と白はリヴァースする
狂気と正気はリヴァースする

そしてみんなは
リヴァースしても
かつてのじぶんを振り返ったりはしない
いつもじぶんは白のつもり
けれどそのときそこは
行方をなくした崖なのだ



間違っても
面白いのと
間違っていないけれど
面白くないのと
どちらがいい

矛盾しているけれど
魅力的なのと
矛盾してはいないけれど
魅力がないのと
どちらがいい

不合理だけど
深いのと
合理的だけど
浅いのと
どちらがいい

嘘でも
ほんとうらしいのと
ほんとうらしいのに
嘘なのと
どちらがいい

正しいけれど
息苦しいのと
正しくないけれど
深呼吸できるのと
どちらがいい

知的だけど
楽しくないのと
知的ではないけれど
楽しいのと
どちらがいい

渾沌だけど
生きているのと
秩序があるけれど
死んでいるのと
どちらがいい



※岡山県新見市哲西町・鯉が窪湿原にて



かたちは
ただかたちなのではない

ひとつのかたちが
現象するとき
そこには
かたちを生まだす
そのかたちでなくてはならない
秘密の力が働いている

その力を問うことは
自然の秘密を
ひらこうとすることだ

けれども
その扉をこじ開けようとする
自然はもう姿を変え
ほんらいの力を見せてはくれない

秘密をひらくためには
自然のほうから
扉をあけてくれるのを
辛抱強く待たねばならない

それはわたしじしんが
ひらかれる力を持ちえて
はじめて得られる僥倖である

わたしもまた
ただわたしなのではなく
わたしが生まだされている
秘密の力とともにあるからだ



じぶんを
笑うためには
じぶんを
突き放さねばならない

けれど
じぶんを
突き放すということは
じぶんから離れることではない
演じるじぶんになることだ

深刻になるとき
それは演じられているのではない
じぶんに囚われているだけだ

握んだものから
手を離さないでいることで
罠に捕まってしまっているのだ

じぶんを突き放したとき
そこから手を離して
罠に捕らわれてしまっていた
じぶんを笑うことができる





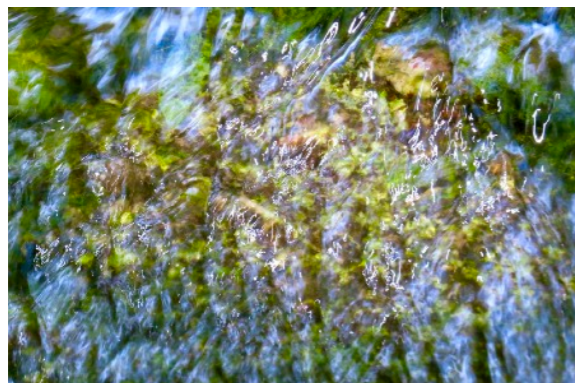
ぼくの無意識を
ぜんぶ集めて
それが世界になるとしたら
どんな世界になるだろう

意識できることだけからしても
それは世界そのものには
ならないほうがよさそうだ

みんなの無意識を
せんぶ集めて
それが世界になるとしたら
どんな世界になるだろう

ひょっとしたら
いまある世界が
その世界なのかもしれない

そうだとしたら
絶望すべきなのか
それでも希望をもつべきなのか
パンドラの箱の底に
希望が残されていたように



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて



流れ
流され
時代は
変わり

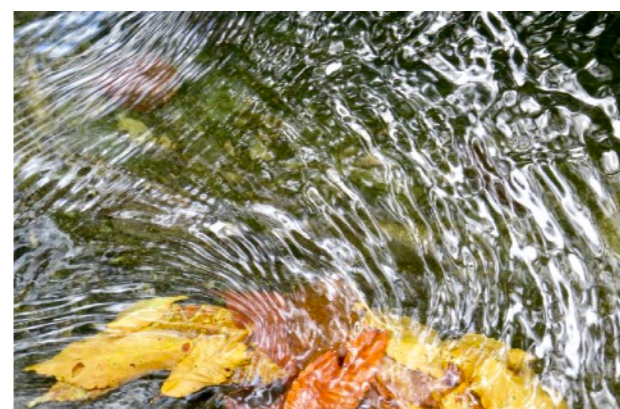
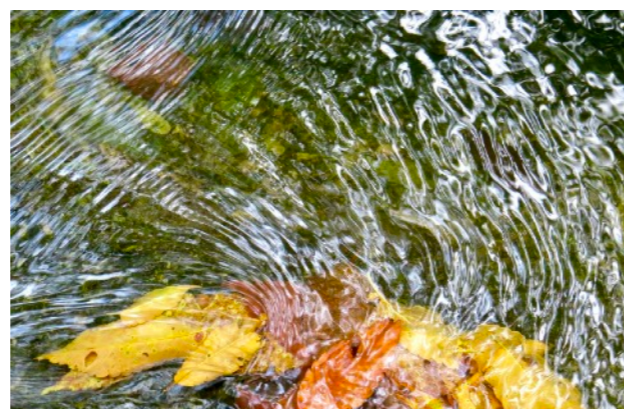
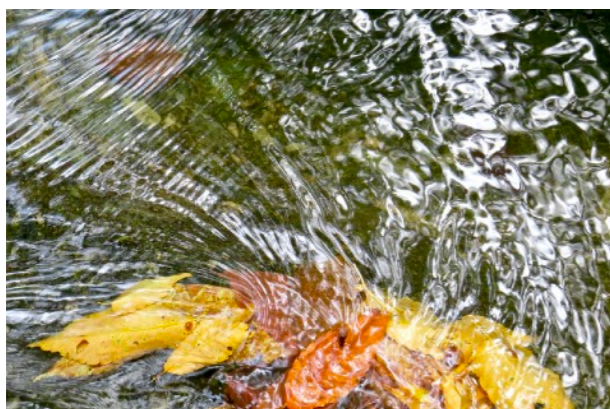
流れ
流され
知識も
変わり

それでも
流れのなかでさえ
変わらぬ時を

流れ
流され
人は
変わり

流れ
流され
心も
変わり

それでも
流れのなかでさえ
変わらぬ知恵を





新しい今を
生きるとき
新しい私が
そこにいる

新しい私を
生きるとき
新しい心が
そこにある

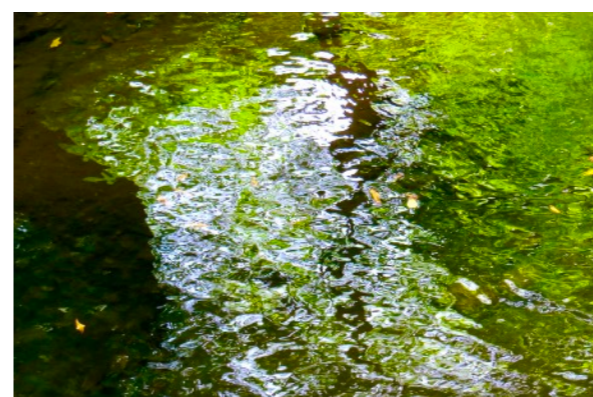
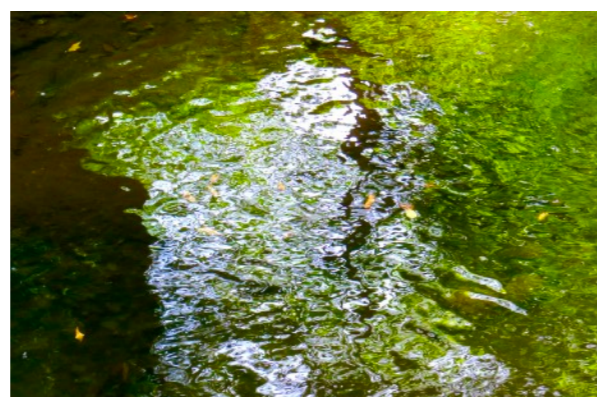
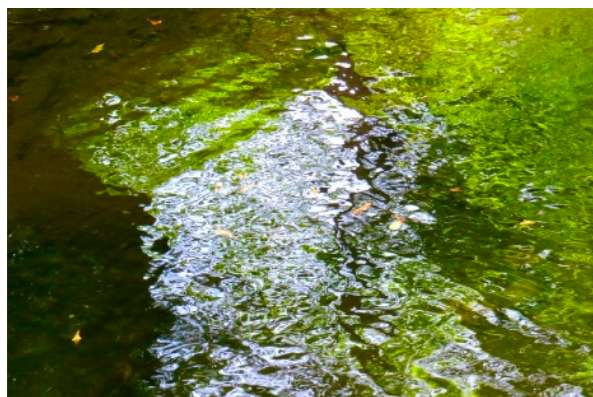
新しい心で
生きるとき
新しい光が
そこにある

新しい光で
照らすとき
新しい夢が
そこにある

新しい夢を
生きるとき
新しい形が
つくられる

新しい形で
あそぶとき
新しい歌が
うたわれる

新しい歌を
うたうとき
新しい今が
そこにある



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて



わたし
について
考えるわたし
について
考えるわたし
について
考えるわたし
について

どこまでも入れ子状態になる
わたしの虚無を
超えることはできるだろうか

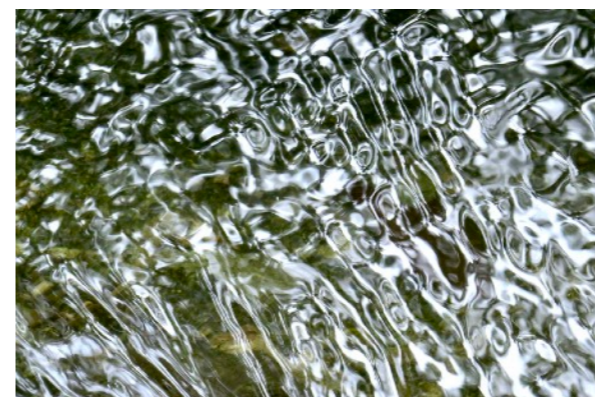
気づいたらここにいる
根無しのわたしに

ここにいる前に
じぶんが
ここにいることを
選べるのだとしても

わたし
について
考えるわたしの
入れ子状態のわたしは
どこまでも
わたし
について
考えるわたしだ

わたしは
このはてしない虚無を
受けとめてくれる
大いなる虚無を求めながら

それでも
わたしは
わたし
について
考えるわたし
であることをやめない



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて



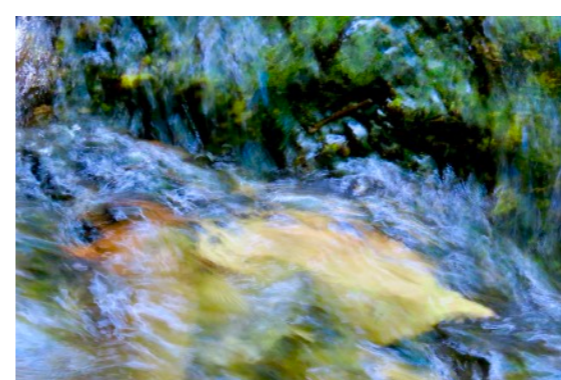
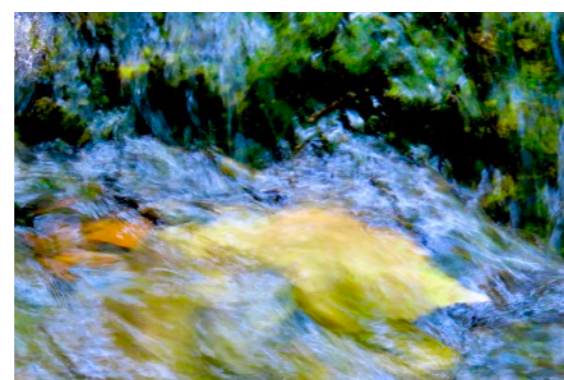
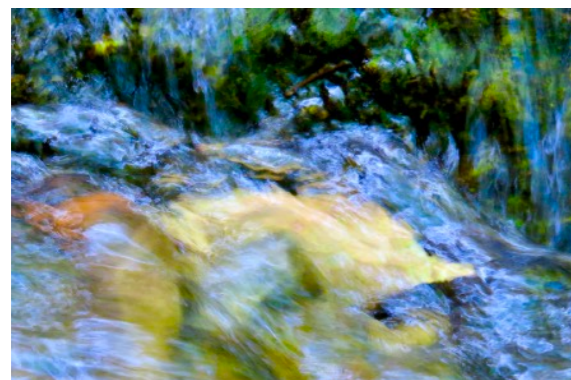
わたしの言の葉は
わたしだけの言の葉
わたしがいなくなれば
その言の葉もいなくなる

けれどわたしの言の葉は
あなたの言の葉とふれあい
混ざりあい溶けあい
あらたな言の葉が生まれてくる

わたしの言の葉は
わたしだけの言の葉ではない
数えきれない言の葉には
すべてその源がある

その源から流れ出した水は
すべての言の葉へと流れ込み
あらゆる川となり流れ
また地下から湧き出しつづけている

そして水は流れ下り交わり
大いなる海へと流れ込み
やがてまた言の葉の源
天へと還っていく





とおい未来には
ひとはじぶんのちからで
じぶんのからださえ
思いのままに
変えることもできるだろうが

いまはまだ
ひとがじぶんのちからで
変えることができるのは
じぶんのところだけ

喜びに溺れないちから
怒りに負けないちから
哀しみに囚われないちから
楽しさに酔わないちから

そのちからさえ
思いどおりには使えず
怒りを抑えることさえ
ときにはひどくむずかしい

じぶんでじぶんに
働きかけられるためには
長い長い時間をかけて
ちからをひとつひとつ
育てていかなければならない

ひとが生まれてくるのは
思いどおりにならないじぶんを
もてあましながら
それでもしんぼう強く
歩いていくためのようだ





死を前にしたとき
何を学ぶか

死後どうなるかは
世界観によって
異なった姿となるだろうが

生に対して
死は
絶対他者として
姿をあらわすことになる

絶対他者に
対するならば
学ぶべきは
みずからの限界から
解放されるための道標だろう

その道は
生の途上から
歩みはじめる歩みだが
死を前にしたとき
確かめねばならないのは
いまだどり着き得ている場所だ

古人はそのとき
なにを見たのだろうか
そしてわたしは
そのとき何を見るだろう





異界への扉は
どこにでもある
気づかないだけだ

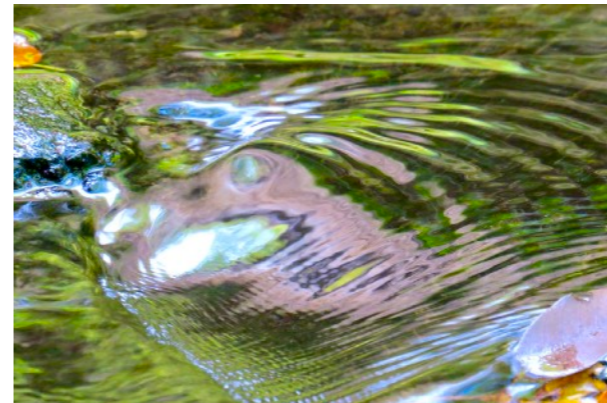
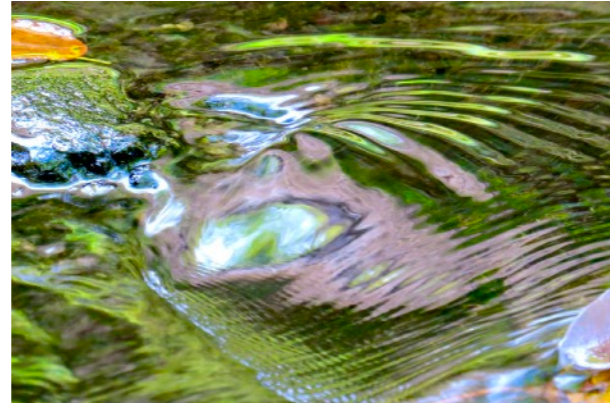
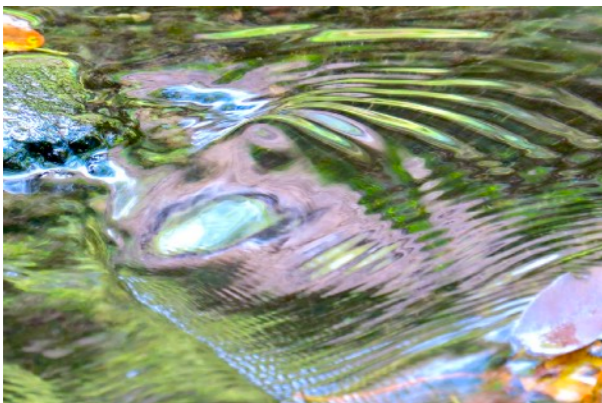
神々も鬼も天狗も
見えないものたちは
その扉の向こう側にいる
いないと思っているだけだ

見えないものたちを
見るためには
内に棲んでいる
見えないものたちに
気づかねばならないが

気づいていなくても
異類たちは
内に棲みついでいて
見えないままに
扉をあけて入ってくる

気づいていないからこそ
扉は勝手に開けられてしまい
無意識の力がわたしを翻弄する

異界への扉に気づき
門番となることだ
善き霊たちを迎え入れるためにも





瞬間
といったとたん
瞬間は
もうその瞬間ではないように

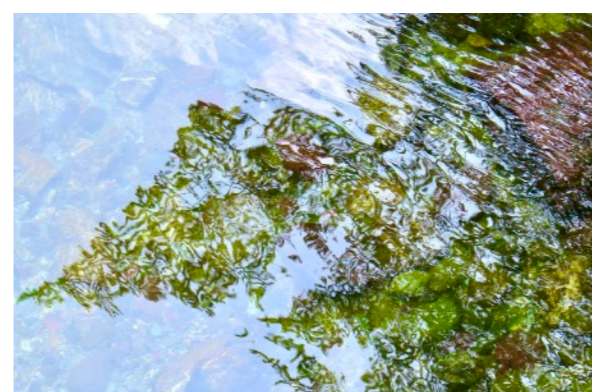
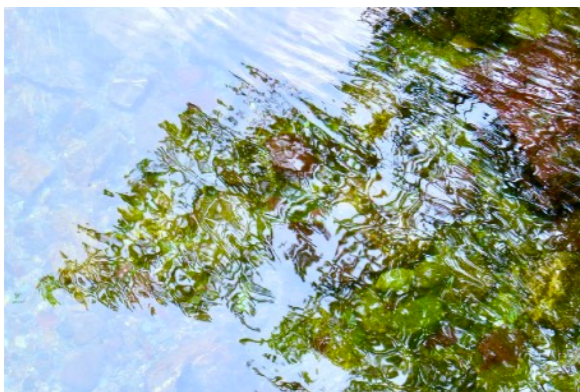
言葉は
言葉になったとたん
じぶんを裏切ってしまうてはいないか

それでも
たとえ沈黙のなかでも
言葉は言葉であることをやめないだろう
矛盾を超えたものを指し示すために

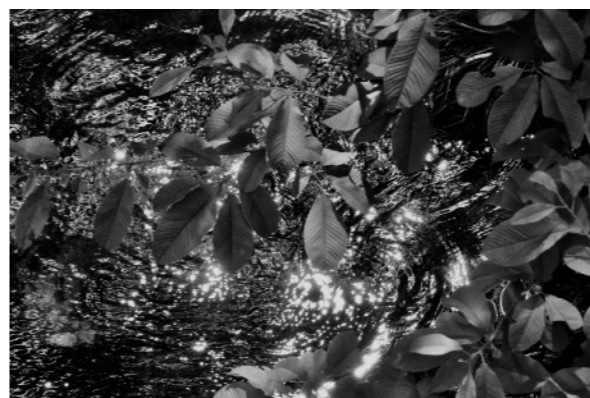
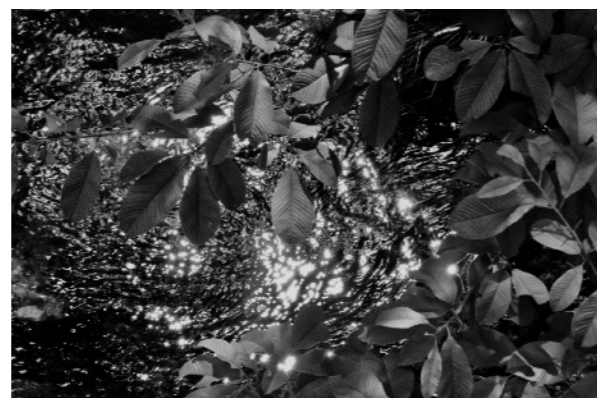
私
といったとたん
私は
もうその私ではないように

私は
私であるといったとたん
私を裏切ってしまうてはいないか

それでも
たとえペルソナとしてでも
私は私であることをやめないだろう
矛盾をこえて私であるために



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

わたしは
ここにいるけれど
わたしは
どこにいるのか

からだのなかに
いるのか
こころのなかに
いるのか

わたしは
あなたをみて
あなたは
わたしをみているけれど

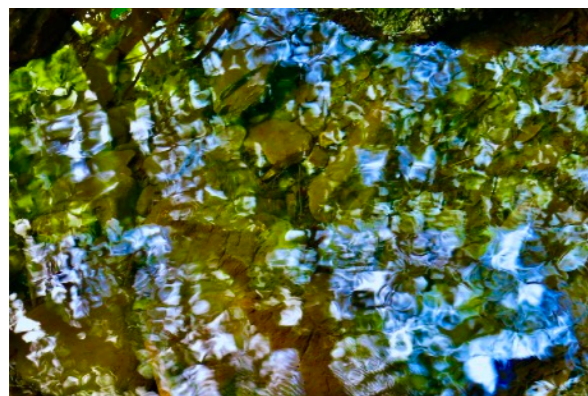
わたしは
わたしを
どうしても
みることができない

わたしが
ねむっているとき
わたしは
どこにいるのか

どこにも
いないのか
どこかしらないところに
いるのか

からだのなかにいても
こころのなかにいても
わたしは
どこにもいない気がする

わたしは
ここにいるけれど
わたしは
どこにいるのか



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

わたしは種
わたしという種

わたしは
わたしという種を
大地に蒔く

ときに肥沃な大地
ときに砂漠ような大地に

種は育ち
種を生み
その種はまた
新たな種を生み
みずからを育て

わたしは種として
旅をつづけ
繰り返し生き
繰り返し死をむかえる

けれど
種を生きるとき
わたしは
みずからが蒔いたことさえ忘れ
みずからの命運を嘆きもする

わたしは種
わたしという種

わたしは
わたしという種を
大地に蒔く
蒔き続ける

わたしはなぜ
わたしという種を蒔き
育てようとするのだろう

いずれその種が
まだ見ぬ姿になることを
夢見ているのだろうか

それとも
それそのものが
遊戯なのだろうか

わからぬままに
わたしは
わたしという種を
大地に蒔く a



サクリファイスの
倫理的意義という言葉
物心ついてから
くり返し耳にしてきた

サクリファイスという言葉の意味も
倫理という言葉の意味も
意義という言葉の意味さえ
知らないままに

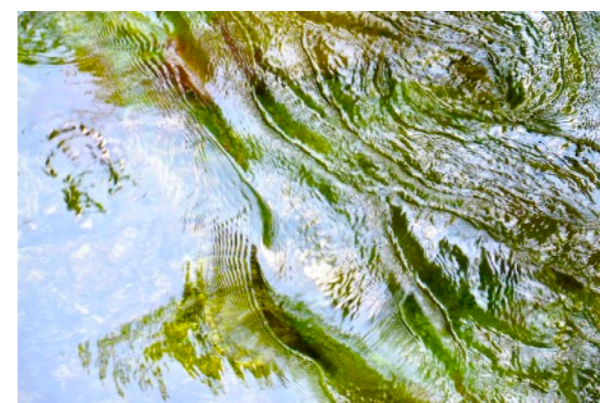
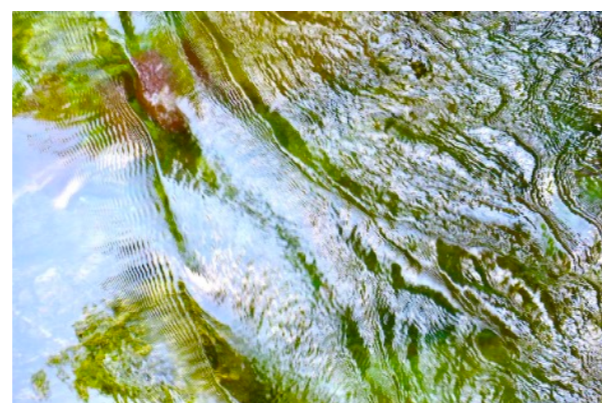
耳にしなくなってからも
深みでリフレインする
呪文のようにどこかで響きつづけている

言葉は
意味を超えて
働くものだ

そしてやがて
その意味の深みから
言葉を従えながら
生々しい姿であらわれてくる

サクリファイス
というのは
まさにそういうものだ

わたしという存在は
どんなサクリファイスとして
生まれてきたのだろう
そんなことを
みずから問いかけもするように





外なる悪を
為さぬためには
内なる悪に
気づかねばならない

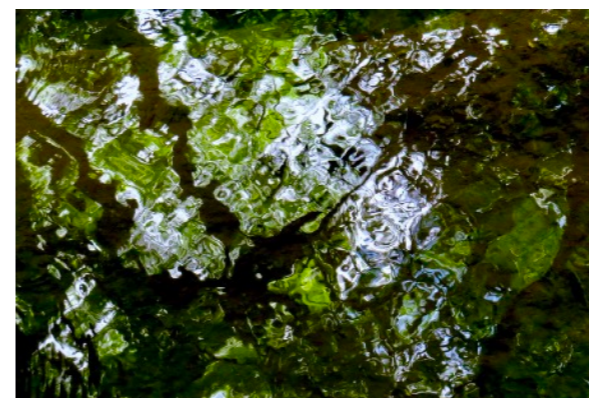
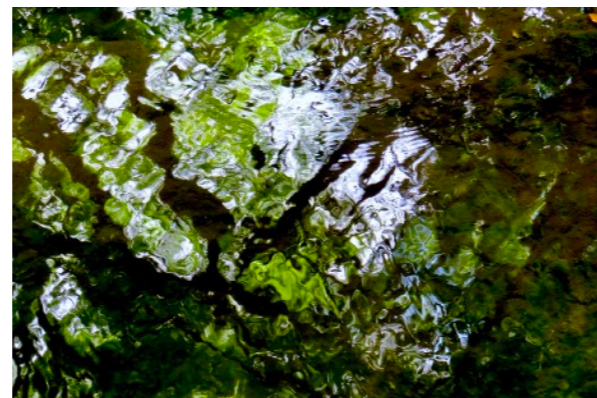
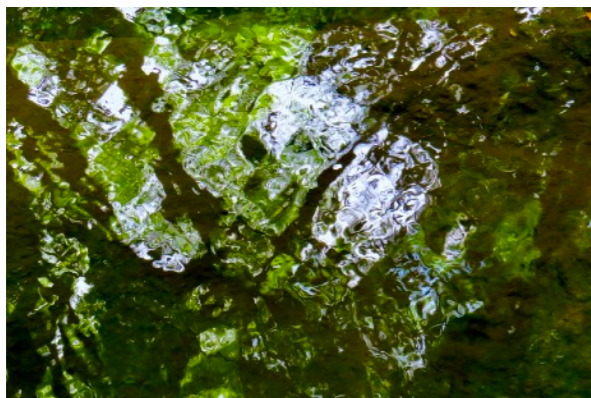
外なる悪をばかり
糾弾する者は
みずからの悪には
盲目である

知らぬ悪は
避けようもないが
知るがゆえの悪は
やがて泥に咲く花ともなる

差別を
避けるためには
内なる差別に
気づかねばならない

外なる差別をばかり
糾弾する者は
みずからの差別には
盲目である

知らぬ差別は
避けようもないが
知るがゆえの差別は
やがて差ゆえの光を見る者ともなる





林檎という言葉は
すでに目の前の林檎ではない
私という言葉が
すでにこの私ではないように

林檎はいちど
林檎からはなれて
再創造されて
はじめて
林檎という言葉になる

では
私がいちど
私からはなれて
再創造され
私という言葉になるときはどうかろう

私という言葉と
この私は
その合わせ鏡のなかで
どこまでも
互いに照らし合うのだが

ときに私という言葉は
この私からはなれ
私を演じはじめたりもする

語ることが
騙ることでしかないように
話することが
離すことでしかないように

